Pseudonotholca japonica に就て

丸 川 久 俊

農林省水産試験場

Notes on *Pseudonotholca japonica*

By Hisatoshi MARUKAWA

筆者は嘗て 1921 年水産講習所々屬海洋調査船たりし天鷗丸によりて行はれたる日本海横斷海洋調査に當り 80 個所に於て採集されたる浮游生物材料に就き鏡檢したるが津輕海峽西部白神埼南方數哩の地點、佐渡彈埼北西百二三十哩、朝鮮水源端の東方數哩及同長鬐の東方六七十哩の 4ヶ所に於て輪虫類の一新種の分布せるを認め 1928 年水産講習所發行の海洋調査彙報第二卷第一號に於て“輪虫類の一新屬一新種”と題して本種を發表、同じく“日本海蜉に就て”と題し日本海産浮游生物調査の綜合的成績を發表し本種は恐らく日本海にのみ特産する同海固有の浮游生物なるべしと紹介せり。

然るに本報告發行の翌年即ち 1929 年 Bruno SCHULZ 及 Alfred WULFF は 1927 年獨逸學術海洋調査會が海洋調査船ボザイドン號を以て施行したる白海の海洋及浮游生物に關する調査成績 „Hydrographie und Oberflächenplankton des Westlichen Barentsmeeres im Sommer 1927” を同會出版の報告書 Berichte der Deutschen Wissenschaftlichen Kommission für Meeresforschung, neue folge Bd. IV, Heft 5 に報告したるが其の第 333-334 頁に於て本種が諾威北部西岸沿海と白海の西部數ヶ所に於て採集したる浮游生物材料中に出現せしことを報じ其の背面及側面圖と筆者が嘗て試みて能はざりし胃部咀嚼器 malaete の寫生圖とを挿入するところありたり。

其後筆者は農林省水産局所屬漁業取締船俊鷗丸が 1936 年夏季オホーツク海より又同じく快鳳丸が 1937 年夏季ベーリング海及北氷洋の一部より採集し來たりたる多數の浮游生物材料に就き鏡檢したるが前者の採集材料中よりは中部千島北岸（北緯 47° 15′、東經 152° 10′）及堪察加西岸南部沿海（北緯 51° 35′ 東經 155° 55′ 及北緯 51° 45′ 東經 155° 30′）に、又後者

の採集材料にありては堪察加東岸沿海（北緯 $52^{\circ} 00'$ 東經 $158^{\circ} 35'$ ，北緯 $54^{\circ} 28'$ 東經 $161^{\circ} 03'$ ）に本種を認むることを得たり。

即ち本種は決して日本海特有のものにはあらずして北太平洋にありては北はベーリング海及オホーツク海より日本海に亙りて産し，北大西洋にありては北部諸威沿海より白海に亙りて産すること漸く明瞭となれり。若し今後西比利亞北部沿海産浮游生物の研究にして進まば或は本種の分布上北氷洋を通じて東西兩洋に連鎖あるを見出し得るに至らんか。